

デボラ・ヘイの実践で起こるパラドックスについて

お茶の水女子大学大学院 太田真由

1. 研究目的と方法

1960年代、M. カニングハムの元で踊り、ニューヨークのジャドソン・メモリアル・チャーチで活動していた当時の前衛的ダンス集団の一員であったD.ヘイ(Deborah Hay, 1941-)は、現在も米国を拠点として活動を続ける舞踊家である。近年、欧州等で注目される彼女の振付は、言葉で行われていることで知られている。そこで本研究では、その言葉にパラドックスが含まれているというヘイのダンサーの言説に着目し、そのパラドックス表現の実際とそれがもたらすダンサーへの心的影響を明らかにすることを目的としている。

研究方法は、パラドックスに関するヘイ自身の著述やヘイに関する先行研究を対象に文献研究を主として検討を進める。

2. 結果と考察

(1)ヘイのパラドックス表現

ヘイは1970年代から“the practice of performance”と彼女自身が呼ぶ、実践、且つ創作方法を行っている。ここでヘイは、言葉を使いダンサーに指示をし、振付の発展を行なう。ヘイのダンサーは、ヘイとの関わりにおいて、パラドックスを有する実践に出会う(Ferris 2013; Soubry 2008)と言う。例えば、ヘイは“頭を動かせ”という。これに対しダンサーは頭部の動きを探求するが、ヘイは実際にはそうした動作だけを望んでいるわけではないと言う¹。また“スウィングを無くしたスウィング”

(Drobnick 2006)という指示も見られる。このような矛盾を含む指示をダンサーはパラドックスと捉えていることが分かる。ヘイのパラドックス表現は、課題を伝える指示のみならず、ダンサーが一つの課題に取り組み、答えを見つけだそうとしている次の瞬間に、その取り組みを覆す指示にも含まれる場合がある事が分かる。その経験もパラドックスと筆者は考える。

(2)パラドックス表現の意図

ヘイがパラドックス表現を与える意図は何か。対象とした文献資料からはいくつかの理由が浮かび上がる。

ヘイのダンサーは「実験に再三にコミットしている」(Rothfield 2019)と言われているという点である。パラドックスがあることは、ダンサーの注意の対象が複数になるという状況をも

たらず。このことからパラドックス表現は、ヘイの指示に取り組むダンサーが、絶え間なく自らの動きを探求する時間を作り出すことを結果として作り出していると考えられる。

またヘイは「肉体の現実、実際に一瞬一瞬変化している」(Hay 1989)と述べるように、身体が常に変化するという身体観を持っている点が注目される。彼女はパラドックス表現を通じてダンサーにその身体観を伝えていると考えられる。この身体観については(3)で詳しく見る。

そしてヘイは、「作品には目標がない」とも述べる(Rosen 2016)。パラドックス表現をヘイが発することにより、ダンサーは動きを探求するが、明確な動きの答えを発見することをヘイは望んでいないと考えられる。パラドックス表現によって一定の動きの形を決めるのではなく、常に動きを探求し続けることをヘイは重視していると考えられる。

(3)ヘイ自身のパラドックスに対する考え

ヘイは「身体がパラドックスである。何故なら身体は、私の実践の要素(element)であり、それと同時に想像的状态(an imagined condition)である」(De Spain 2014)と述べる。ヘイは身体を実践の中で扱う一方、身体を想像的に捉える事をパラドックスと考えている事が分かる。また、ヘイの著書(2000)第14章「My Body Feels Weightless in the Presence of Paradox」で、パラドックスという言葉そのものの説明は見られないが、『EXIT』(1995)という作品の内容に言及している。そこからこれが、過去と現在を含意した作品であり、時の経過を経験する身体をパラドックスと捉えていることが分かる。パラドックス表現は、時間と空間に併存している複数の身体性を言葉で引き出そうとする時に有用であると考えられる。

3. まとめ

ヘイのパラドックス表現は、実践において、ダンサーに動きの制限を与えないと共に、ダンサーが動きに対して常に新しい試みを持たせる一つのツールとしてヘイが扱っている事がわかった。また、ヘイ自身は、身体をパラドックスと捉え、その中には過去と現在を経験する身体に着目している事も分かる。パラドックス表現はヘイの実践の特徴の一つであり、それらを通してダンサーは、答えのないヘイの問いに、自らの身体を通して探り続ける機会を与えられていると筆者は考える。

¹ Deborah Hay 2019 ワークショップ “being a pig” (於 Abbotsford Convent, Melbourne, Australia 2019/1/14-25) 筆者参与観察記録より